

## ガーデンアイランド北海道 in きよさとフォーラム

8月5日、6日の両日、網走管内清里町で「ガーデンアイランド北海道 in きよさとフォーラム」が開催されました。

このフォーラムは、「美しい庭園の島(ガーデンアイランド)」北海道の実現を目指して、2008年に全道規模の花と緑のテーマイベントを計画している「ガーデンアイランド北海道2008を実現する会」が地元「ガーデンアイランド北海道 in きよさと実行委員会」と共催で実施したものです。

フォーラムは'03年から帯広、函館、旭川、釧路、鹿追でそれぞれ開催されてきており、今回で6回目。2日目の講演会とパネルディスカッションには約300人が参加、熱い議論が展開されました。

### 基調講演

#### 今、この国はローカル(田舎)が面白い

鈴木 輝隆氏(すずき てるたか) 江戸川大学教授

1年のうち150日ぐらい日本各地を駆け巡り、生き生きとしたローカル(田舎)のまちづくりを実践的に研究している鈴木教授に、長野県小布施町、富山市八尾町(旧八尾町)、高知県黒潮町などのユニークなまちづくりの取り組みを紹介していただき、元気な地域づくりの要件とは何か、ガーデンアイランド北海道2008の実現に必要なものは何かを語ってもらいました。



#### ローカルデザインの必要性

・ローカルデザインということで話をしてきたが、それは暮らしを豊かにする人々の自然観とか、そこでの創意工夫とか、格闘とか、ユーモア、そういうような個性の凝縮にある。日本を元気にするという事は、実はそういうローカルデザインをどうつくっていくかである。

#### 人が地域に貢献する町づくり

・これまで地域の交流ということがよくいわれてきたが、これからは地域への貢献ということが重要。住民一人ひとりが、地域に貢献をしていく。そして、自分自身が変わるということが重要。

・団塊の世代が約680万人、そのうち大都市には350

万人いる。そういう団塊の人たちをどういう形で地域に迎えていくかが求められている。

・団塊の世代も活躍できるのはあと15~20年。そういう人たちが退屈な人生を送るのではなく、社会貢献をすることが必要。

#### 地域を安定的に永らえる解を見つける

・自立という言葉には二つある。自律と自立。特に、自分の未来を自ら意思決定できる「自律」が、地方分権とか、地域の個性、住民自治において重要。そこから経済的文化的な「自立」につながる。

・いまは不確実な時代、逆にいえば、行政が決めてきた決まりきったことから逃れるチャンス。

・地域の資源を持続的にしていくためには、地域の生産するものに才能系、すなわちデザイナーとか、アーティストとか、いろんな地域の価値をつけるようにする。退屈しない、持続できるような、文化もある町をつくっていくことが必要である。

#### 地域を変える力

・地域の力とは、いわゆる経済資本(お金)、人的資本(人材)、社会関係資本(人間関係)、それから文化資本、環境資本。この五つをもって地域力となる。中でもこれからは社会関係資本が大事。共に助け合っていない地域には地域力がない。

・その地域の力を発揮できる最強の人は一体誰なのか。それは、経験があって、意欲があって、自分以外の人の力も借りられるネットワークのある人。この人が最強である。このような人を地域の中で育て、地域を変える力にしていくことが重要。

#### 小数点以下の発想

・そのためには、少数点以下の発想が必要。すなわち1と2の間に無限にアイデアがあり、一人ひとりが小さなできそうなことから始めるという発想。こんな小さなことかということの集積が重要で、そこに創造的なことが生まれる。

#### ガーデンアイランド北海道への期待

・いい人生、いい時間を過ごす場所が世界からなくなってしまっている。日本人の帰るところがない。そして日本が残さなければならないところがある。それが清里町にあるのではないか。北海道はまさに大事な場所じゃないか。そうした時を永らえる発想で、ガーデンアイランド北海道の実現を目指していただきたい。

## パネルディスカッション

### 美しい北海道の農村、人、自然。私たちが守るもの、つくるもの。



内倉 真裕美氏 (うちくら まゆみ)  
ガーデンアイランド北海道 2008 を実現する会

小俣 寛氏 (こまた ひろし)  
財団法人北海道地域総合振興機構主任研究員

川筋 守氏 (かわすじ まもる)  
NPO 法人きよさと観光協会会長

奥山 英明氏 (おくやま ひであき)  
清里町花と緑と交流のまちづくり委員会事務局長・東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議事務局長

#### コーディネーター

小林 昭裕氏 (こばやし あきひろ)  
専修大学北海道短期大学教授・日本造園学会北海道支部長

**小林** 斜里岳は素晴らしい山です。特に山麓が美しい。また、清里町の基調は青だと感じます。その青を強く表現しているのは、この町のシンボルの斜里岳ではないかと思います。

ガーデンアイランドの取り組みは、美しい北海道を道民の手で実現していこうという運動ですが、私もそれを支援している人の一人です。

**小俣** 今日はフランスの農村の事例を紹介します。フランスの農村全体を見たときに、実はこれはガーデンそのものであると、私は確信を持ちました。農村部というのは、都市との相互依存関係で成り立っている。都市はいろんな機能を持っていますが、その人たちは常に快適な生活をしているわけではなく、それを癒す場所、落ち着ける場所として農村を非常に大切にしています。

しかし、ここ四半世紀前までは農村は非常にさびれたイメージ、暗いイメージ、経済的にも非常に厳しいイ

メージしかなく、そうした中で先進国は農村整備に力を入れてきた。地域住民も努力してやってきたという経緯があります。

また、フランスにはスローフードに相当したものでラベル・ルージュと原産地表示 AOC というマークがある。こうした地域の特徴なり品質の高いものを評価する仕組みが出来上がっている。

「景観とは人の営みの結果である」と、ある地理学者が言っていました。営みの質が高くなれば、質の高い風景が生まれるということです。

アルプスの美しい芝地の風景は、高地放牧で家畜が草を食べ、これを毎年繰り返して、千年ぐらい続けてできた風景です。そういう場所を地元の人たちはアルプスのジャルダン、すなわちガーデンといい、それを地道に維持している。大変な作業ですが誇りをもってやっています。

**内倉** 私は、地元の恵庭がいま面白いと思います。花の町ということで、かなりの人が訪れてきています。それもただ見るだけではなく、花苗の生産でも北海道では一番です。それから、農産物もかなり多品種をつくっています。清里町さんのような大規模な農業ではなく、いろいろな作物がとれる町に住んでいるわけです。そういう中で、街の人はガーデニングを楽しむ、農村の人は作物をつくりながら風景を生み出していく。

デザイン性は重要です。デザイン性があることで初めてすてきに見える価値が生まれる。そのような花の町づくりが必要です。全国いろんなところに行って思うのは、赤、青、黄と、どこにもある草花なのですね。やはり宿根草などを増やして、地域性を出していくことが必要です。

**川筋** 私は 18 歳までこの清里で育ちました。その後、大学で東京に出て、そして仙台の会社に就職し、東北各県を 5 年ぐらい歩き、東京にも住みました。20 年後、38 歳のときにまた清里に戻ってくることになりました。清里に帰れば、古くても家はあるし土地もあるので、何とか生活していけるだろうということで帰ってきました。それからいま 21 年たちました。最初の十数年間はそれこそ生きるために、回りを見る余裕はありませんでした。

そうしたところ、昨年、観光協会長をやれという話がありました。東京と仙台にいたころは、清里に対する思いが非常にあり、何かの形でふるさとに貢献したい

と考えていました。そこで、観光協会の仕事をやらしていただくことで、何か地域に貢献できるのではないかとと思うようになりました。

それであらためて周りを見わたしました。18年間過ごした子どものころの景観と比べると、屋敷の周りが違ったり、畑の形も昔からずいぶん変わりましたが、そこに住む人の生き様や心根は同じように思いました。そして今、子どもたちにこのような清里のよさを伝えていきたいと感じています。

**奥山** 花と緑と交流のまちづくり事業には町民の皆さん方には多大なご協力をいただいております、それを5年、6年と継続してやってこれたことは素晴らしいことだと思います。

この町の花の事業はコスモス街道から始まり、今では商店街から各自治会、学校、公共施設まで広がっている。この住民活動が自然景観を守る、あるいは作っていかうとする町民の心構え、その表れではないかと感じています。

重要なのは、経済・産業の振興発展と自然景観を守ることが共存・共生できるかということです。私も何とかこの町の自然景観を守りながら、コミュニティビジネスを開発しようと、観光も含めた地域振興、地元の農産物を生かした特産品開発を考えています。

地元商工会の立場としては、地域の商工業の発展ということを頭に置きながら、観光客の増加、交流人口の増加、短期・長期の移住・定住、まず人を増やすことが求められているのだと思います。

**小俣** ヨーロッパでも、昔、国の政策で食料を自給できなかった時代、防風林をどんどん切ってしまった経緯がある。それが今、社会の価値が変わって後悔している。

清里に来て驚いたのですが、規模はヨーロッパ並ですが、その中にあの防風林があることで人間的な親しみやすい景観になっています。

それから、斜里川は北海道では短く早い川で、そこには鮭や鱒が上ってくる。その自然を守っている。そうしたところで、防風林を保全しつつ現在の大規模農業を展開している。清里の例は、海外の研究者たちも非常に興味を持つものと思います。

**内倉** 私は今日網走から娘の運転でここまで来ました。娘は東京農大網走校の2年生ですが、今一次産

業のアルバイトをどんどんしています。そして、「おかあさん、斜里岳きれいでしょ」と誇らしげにいうのです。そういう意味で、この地域のことをもっと自信を持っていただきたいと思います。

また、広域的に取り組むことが必要です。1カ所ではなくて手を結び合ってやる。知床圏というのでしょうか。農村景観、それをつくる人たち、また町の人たちが一体となり取り組むことが必要です。

先ほどいわれたデザイン力ですが、そこにいる人たちでは分からない部分が、外から来た人の感性ではよく分かるということがあります。そのためにも、いろんな人に来てもらうことが重要です。そして、いろんな人たちの意見を素直に聞き、自分のものにしていく、財産にしていくことが必要です。

**鈴木** 北海道は簡素で健康というイメージがある。それは、丈夫で長持ちという感じ。自然や生活から生み出された健康で素朴な美が北海道にはある。美しくしようと、あまり力が入りすぎると厚化粧となりどこもみな同じになっていく。

それから化粧というもの、つけるばかりが化粧ではなく、ひげを剃ったり、髪を切ったり、とることも化粧です。いまは北海道らしくないもので化粧しすぎてしまっている。丈夫で簡素で健康的な北海道であってほしい。それを目指すのが清里町であり、ガーデンアイランド北海道であるのではないのでしょうか。

**小林** 今回、町の小学校の副読本を送ってもらいました。その中に、鉄道の通ったところという面白い詩があるのです。70年前の詩です。

「列車が走る、どこまでも。森越え、野を越え、丘越えて、じゃがいもの花、亜麻の花、麦の穂波に…」と歌っているのです。鉄道というものができて、外とのつながりも生まれてくる。そのときに、その喜びと、自分たちの農業を中心にした町の美しさを歌い上げたものだと思います。この歴史が清里町の資産です。探していけば、まだまだこの町には眠っているものがあると思います。その中から、自分たちの地域づくりの活路を見出していきたい。そして、鈴木先生がいう素朴で健康な美、にじみ出てくるような美しさのある農村を長い時間をかけてつくっていただきたい。

そうすることで、次の世代、その次の世代に素晴らしい種を残すことができるものと思います。